

令和2年11月1日発行
(毎月1回1日発行)第502号

11

令和2年/11月号
No.502

日本教育

月刊

特集〇道徳教育2020



公益社団法人 日本教育会

Public Interest Incorporated Association of Japanese Education Society

「いのちの授業」の「見方・考え方」と実践のヒント



特定非営利活動法人いのちをバトタッチする会代表
鈴木 中人

1957年愛知県生まれ。長女の小児がん発病を機に、小児がんの支援活動やいのちの授業に取り組み。2005年、会を設立。いのちのバトタッチをテーマに、いのちの輝き、家族の絆、生きる幸せ・働く喜び、良き医療などを、いのちの授業として全国に発信する。

私は、特定非営利活動法人いのちをバトタッチする会の代表として、全国の学校や地域で「いのちの授業」に取り組むことで、道德教育や心の教育の充実支援に取り組んできました。活動のルーツは、私の長女（当時3歳）が小児がんを発病し、3年間の闘病の後、亡くした体験です。

6歳の短い生涯を終えた長女は、最後まで前向きに、周囲への優しさを忘れずに生きました。その濃密な「生の輝き」を間近で見続けた体験から、いのちの大切さ、家族の絆を世に訴えていく活動を目指し、会社を早期退職して、この会を立ち上げました。多くの方の賛同と協力を得て、これまで、「いのちの授業」の講演会やセミナー、「いのちの大会」「いのち

寺子屋」などの社会啓発、がん・小児がんの支援啓発、出版や教材の制作発行などに取り組んできました。

これまでに「いのちの授業」には、15年間で全国の30万人を超える人が参加しています。千校を超える全国の学校を訪ねてきましたが、社会や人の心が揺らぐなかで、「いのちを大切にしてほしい」と願う先生方や家族の姿に、私自身も何度も何度も胸が熱くなりました。

心の教育と「いのちの授業」

今、教育現場において、いじめ、自殺、いのちや生きる実感の希薄化が問題とされる一方で、道德の教科化や、がん教育など、「いのちの授業」に関連するニーズ

がますます重要になり多様化しています。また、新学習指導要領では、予測困難な未知の時代において「見方・考え方」を深めて、生きる力を育む学びが求められており、教える人の「見方・考え方」も問われています。

ところが、コロナ禍もあって、学校の臨時休業による授業時数の確保や感染防止対策への対応に追われて、とても「いのちの授業」にまで手が回らない現状があります。以下では、改めて「いのちの授業」について、指導する立場の先生方としての「見方・考え方」を深め、心の教育としての「いのちの授業」の実践のヒントになることを述べたいと思います。

まず、「いのちの授業」について、次の3つのことを実感しました。1つ目は、

今の時代にこそ、一番大切にしたい学びであるということです。人生100年時代を生きる子どもたちは、予測困難で未知な時代の中で自分の人生を切り拓いていきます。そのためには、人間として大切な「心の根っこ」と「生きる力」をしっかり育むことが重要です。いのちは全ての根幹です。「いのちの授業」は、この「心の根っこ」と「生きる力」を芽吹かせてくれるものです。

2つ目は、「いのちの授業」を進める上で、同じことに戸惑い、「壁」にぶつかっている現状があることです。「何のためにいのちを見つめるのか」「いのちを学ぶとはどういうことか」「虐待や貧困、家庭崩壊など重い現実を背負う子どももいる。きれいな事ではないか」「子どもに死を教えたいのか」「子どもの自殺にどう向き合えばいいのか」「学校現場はますます忙しい。がん教育もある。いのちの授業をする余裕がない」などです。

3つ目は、良い「いのちの授業」には共通点があることです。授業テーマや教材の選び方、発問方法、進め方、先生か

らのメッセージ、学校経営方針などについて、ちょっととした工夫や応用で、子どもたちの心に届く「いのちの授業」にすることができそうです。

何をどのように学ぶのか

では、「いのちの授業」とはどういう授業でしょうか。シンプルに言えば、そのねらいは、本当に大切なことに気付いて、心の根っこを育み、幸せになること、と考えます。一般に、授業とは知識を学ぶというイメージがありますが、いくら知識を学んでも、それを悪用すると犯罪にもなります。すべての知識には、その土台となる「こころ」の育成が欠かせないのです。

「いのちの授業」では、何を学ぶのでしょうか。ひと言で言えば、「嬉しい」「悲しい」「はかない」など「いのち」について実感し、「いのち」の真理（限りがある、かけがえがない、つながっている、など）を知り、自分はどう生きるかを思うことです。

ある小学校で「いのちの授業」を行い

ました。最後に子どもたちの感想を聞いたときに、ある6年生の男子児童が泣き出しました。その児童がその時に感じたことを後に感想文に書いて、担任の先生が届けてくれました。その児童は勉強が遅れがちで、漢字がまったく書けないそうです。いただいた感想文はすべてひらがなでしたが、こんな内容でした。「ぼくはとうさんかあさんにいつもめいわくばかりかけています。おやこうこうしようとおもってもなんのとりにえもありません。なにかないかとかんがえたら、とうさんかあさんよりはやくしなないようになりました。ぼくはがんばっていききます」。この児童は、まだ漢字は書けませんが、「いのちの授業」を受けて、親孝行するために親より先に死なない、という生き方を選んだわけです。

次に、「いのちの授業」はどのような学び方をするのでしょうか。「学び方」というのは子どもの視点から見たものです。「授業」というと「教える人」と「教えられる人」がいますが、私たち大人は「教える人」の視点から、いわば知らず知ら

ずに「上から目線」で指導することがあります。私自身も「いのちの授業」を始めたころは、自分の長女の病気を素材に「世の中には生きたくても生きられない人がいる。君たちは自分のいのちを無駄にしないで、一生懸命に生きて欲しい」と訴えていました。友人からは、その頃は「怖い顔」をしていたけれど、最近では、優しい顔になったねと言われます。「いのちの授業」をきっかけに、いのちに向き合い、その子なりに自分に問いかけて、大切にしたいことをみつけてもらえれば良いと変わりました。型にはめるのではなく、子ども自身が受け入れる学び方です。

もう一つ、「いのちの授業」では、「死」についても向き合います。「生まれる」「生きる」「死ぬ」ことは、「いのち」そのものです。生だけを強調する、死を遠ざけることではなく、「生死」を自然なこととして、感じる・知る学びが不可欠です。子どもは、子どもなりに受け入れて、いのちへの思いを深めてくれます。

最後に、「いのちの授業」では、最終的に子どもたちを信じるといふスタンスが

必要と考えます。これは「心の教育」全体に通じることですが、短期的な結果や評価を求めるのではなく、長い人生において、自分の生き方を考えることにつながるきっかけにしていくという捉え方が必要です。先生方も、自分の体験を自分の言葉で子どもたちに語りかけてほしいと思います。

「いのちの授業」への9つのヒント

「いのちの授業」づくりには、次のような9つの実践ヒントがあると考えています。それは、①「愛されている」いのちを実感する学び②「限りある」いのちを実感する学び③「かけがえのない」いのちを実感する学び④「つながっているいのち」を実感する学び⑤「生かされている」いのちを実感する学び⑥「生活の中で」「いのちを育む学び⑦「死にたい」「自殺」に向き合う⑧「がん教育の中で」いのちを育む学び⑨「いのちのバトン」を心に刻む」学びです。

これは、全国の学校を訪問して、

良い授業に共通している点でもありません。例えば、「愛されている」いのちを実感する学びとして、子どもたちに自分の誕生にまつわる家族の思いなどを素材にすることがあります。子どもは自分の誕生日は知っていても、その時に親がどんな思いだったかは知らないことがほとんどです。子どもの名前にどんな願いを込めたか、などを通して、親からすると「生まれてきてくれてありがとう」、子どもからすると「生んでくれてありがとう」と実感できる内容にすることで、「愛されている」実感が持てるのです。

一方で、親から虐待を受けている子どもも現実にはいます。ある児童養護施設の方は「親から虐待を受けたり無視をされたりして育った子どもが、親になって自分の子どもを虐待してしまうのは当然で、30年間の不幸の体験がある人は、30年間幸せな体験をして初めてバランスが取れると考えるべき」と話しています。親からの愛情が薄い子どもには、学校で1人でもいいから見護ってくれる大人が必要なのです。

「生かされているいのち」とは

実践ヒントの5番目にあげている「生かされている」いのちの実感では、「いのちは、人間の力が及ばないもの、大いなるものに生かされている」という意識をもつことの必要性を挙げています。その実感が、普通に暮らすことへの感謝の気持ち、生かされている意味を思い、手を合わせて祈るなどの畏敬の念になります。生かされているは、人間だけが実感するものです。AI時代にこそ、人の心が感じられる人間になってほしいものです。手を合わす・祈ることは、人間の自然な営みです。ご飯を食べるときの「いただきます」と手を合わせる行為なども含めて、日本の文化や習慣などの背景を考えることも大切ではないでしょうか。

道徳教育の充実支援のために

これまで、私自身が取り組んできた「いのちの授業」を通して、その「見方・考

え方」や実践のヒントについて述べてきました。いちばん大切な「いのち」について、それを軽んじるような風潮があります。いじめ、虐待、心の病などが多発し、「死ぬ」「消える」「自分なんていなくてもいい」「死んでもリセットできる」と子どもたちの言動が溢れています。いのちの大切さを学ぶことこそ、道徳教育のど真ん中に位置付けるべきと思います。



す。

人は、生まれて、生きて、死んでいく。この真実に向き合うとき、誰もが「いのち」を自然に実感し、「どう生きるか」を思い深めます。今、子どもたちの生活から、リアルな生死がどんどん見えなくなっています。大切な人の死は辛く悲しい。だからこそ、本当に尊いものを教えてくれます。

子どもたちに、自然なこととして、生死に向き合う体験を届けること、いのちは「愛されている」「支えられている」「つながっている」「限りがある」「かけがえがない」ことを、自分の思いとともに語り継ぐこと―きつと、子どもたちは心で感じてくれます。道徳教育の実践を通じて、いのちのバトンタッチを願っています。

(参考文献)

- 『大人のための「いのちの授業」(小児がんで娘を亡くした私が伝えたいこと)』、致知出版社
- 『子どものための「いのちの授業」(小児がんの亡き娘が教えてくれたこと)』、致知出版社
- 絵本『6さいのおよめさん』、文庫